

平成26年度

新潟大学歯学部同窓会・総会  
学術講演会

**摂食・嚥下の生理学**

講師：

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
口腔生理学分野

山村 健介 教授

日時：平成26年4月26日（土）

午後5時10分から6時40分まで

場所：コープシティ花園 GARESSO HALL

新潟市中央区花園1-2-2

- ・生涯研修カードをご持参ください
- ・会費は無料です

**主催：新潟大学歯学部同窓会**

## ● 講演要旨 ●

# 摂食・嚥下の生理学

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
口腔生理学分野

山 村 健 介

最近、医療型療養病床の入院患者の4割強が経管栄養を行っているという調査報告がありました。このことは患者のQOLの維持を考えた際に、口腔科学に携わる人間として憂うべきことだと思います。残念なことに「口腔からの食物摂取は重要である」というコンセンサスに基づく議論は、口腔機能に精通しているか、摂食機能に何らかの障害を抱える人を日常的に観察する経験を持つ者同士でのみ成立するというのがまだまだ現状といえるのではないのでしょうか。健康な一般人、あるいは専門分野の異なる医療人と我々とのギャップを埋めるには、なぜ経管栄養でなく口腔からの栄養摂取が重要なのかを多職種連携の場で説明できることが必要なのだと思います。そのためには口腔からの視点ではなく、全身機能における口腔機能の位置づけを理解した上で、口腔の持つ特異性を主張できることが大切です。

摂食・嚥下は、食物を認知して口に取り込むことに始まり、胃に至るまでの一連の過程をいい、食物としての栄養を体内に取りこむ運動で、生物学的にみると消化管によって行われる栄養摂取の第一段階にあたります。すなわち口腔は消化管の一部であり、消化液を分泌する機能、食物を消化液と混合し、次の段階の消化を行うために移動させる機能は口腔固有の機能ではなく、胃や腸など他の消化管も同様に備えています。しかも、通常我々が摂食に費やす時間は、消化・吸収の全過程からみると、ほんの一部分に過ぎません。それに関わらず、ひとたび口から食べる機能が失われたり制限されたりした際に、人が非常に喪失感を味わうのはなぜなのでしょう。

ひとつの答えが、消化・吸収過程における摂食行動の最大の特徴が「摂食行動は栄養摂取の過程では数少ない動物性機能」ということであると考えます。「のど元過ぎれば熱さを忘れる」ということわざにもあるように、食物を嚥下したあとの消化・吸収のさまは、私たちの意識にのぼることなく自動的に行われます。これに対し、食欲という本能にもとづく基本的欲求に始まり、食物を認知して手に取って口に運び、咀嚼して味わい、嚥下して精神的満足感を得るといった摂食行動には、運動制御、感覚認知、精神活動などの動物性機能の全てがつまっていると言っても過言ではありません。すなわち、消化・吸収の全過程のなかでもっとも脳を使っているのが摂食行動であるといえます。

摂食・嚥下機能を営む上で顎・口腔・顔面領域は「咀嚼や嚥下運動を行うための運動器」、「最初の消化液としての唾液を分泌する分泌器」「食物や食塊、顎・口腔・顔面の

動きから生じる感覚を受容するための「感覚器」としての役割を果たします。これらの機能を制御するのが脳であり、摂食・嚥下を営むためには脳の様々な部位の活動が必要不可欠です。

本講演では、まず摂食・嚥下の解剖生理学と他の消化器官との共通点・相違点を整理した上で摂食行動と脳の活動についてのいくつかの事例を紹介し、私たちが生きる上で摂食・嚥下機能がなぜなくてはならないのかをあらためて考えてみたいと思います。

## 山村健介 教授 略歴

### 学 歴

- 平成2年3月 新潟大学歯学部歯学科 卒業
- 平成6年3月 新潟大学大学院歯学研究科修了（口腔生理学専攻）

### 職 歴

- 平成7年4月 新潟大学助手 歯学部口腔生理学講座
- 平成9年8月 カナダ・トロント大学歯学部 Post Doctoral Fellow（～平成11年8月）
- 平成12年12月 カナダ・トロント大学歯学部 文部科学省在外研究員（短期）（～平成13年2月）
- 平成18年6月 新潟大学助教授 医歯学系摂食環境制御学講座口腔生理学分野（～平成21年3月）
- 平成21年4月 新潟大学教授 医歯学系摂食環境制御学講座口腔生理学分野（現在に至る）

### 専 門

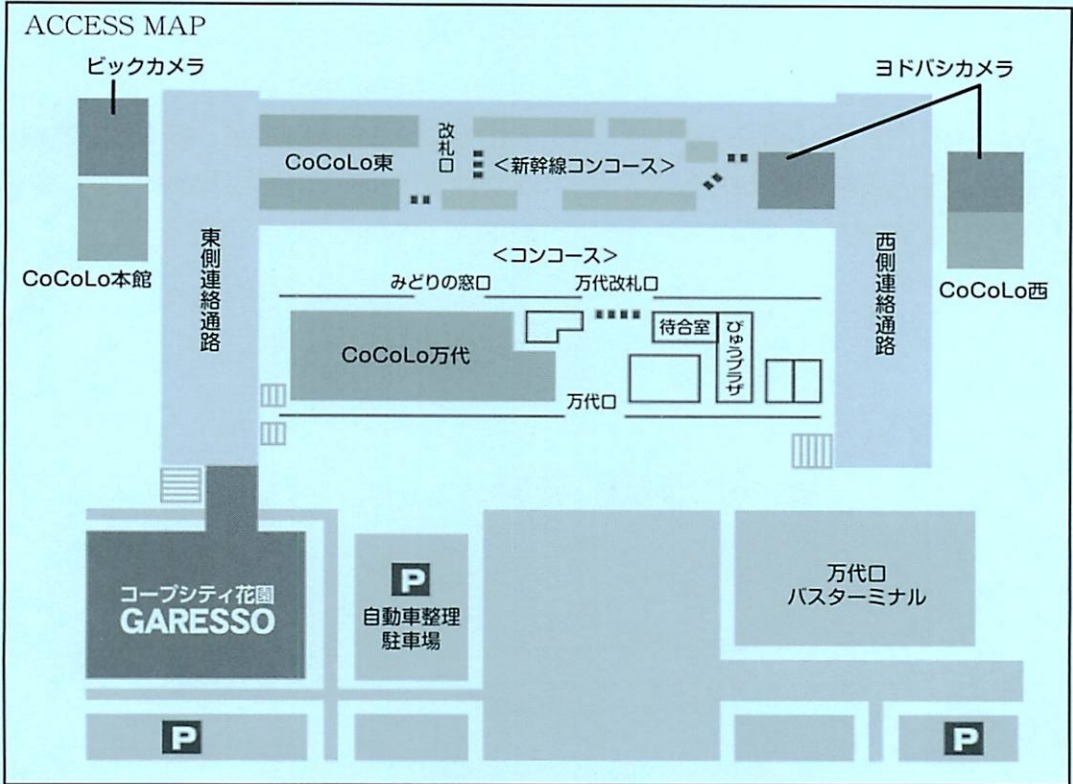
口腔生理学 神経生理学

### 賞 罰

平成20年8月 第18回日本咀嚼学会学術大会優秀ポスター賞

### 役 員

日本咀嚼学会 常任理事・副理事長  
歯科基礎医学会 理事 他



MEMO